

今なお…15万5千人

5年が過ぎても、避難生活者の数は依然として減少する気配がない。今夏も猛暑となる中で、プレハブ仮設住宅の暑さは創造をはるかに超える。仮設暮らしの3分の1が65歳以上の高齢者だ。その内の3割が一人暮らしだ。仮設住宅内で、誰にも看取られることなく亡くなられた方々がいる。また、福島第1原発事故の避難生活者の震災関連死は2,000人に上る。

熊本地震が起き、改めて「災害は人ごとではない」ことを誰もが実感したことだろう。東日本の被災地では、嵩上げなど目に見える工事が行われている。しかし、「先が見えない」と思い悩む被災者が多い事を決して忘れないで欲しい。

つながる応援活動を！

東日本の被災地応援活動は、当時気仙沼に住んでいた卒業生の力をお借りして、「顔の見える」応援をしてきました。そのおかげで、大勢の被災者との絆を結ぶ事ができています。

熊本自身の応援も在校生のひいおばあちゃんとその知り合いの方々から始まりましたが、新たに熊本でも卒業生が被災者となつないで下さることになりました。

先日の事です。たまたま母校を訪ねてこられた先輩は素敵な方でした。今から62年前の1954年に高校を卒業されたそうです。当時のままのチャペルや明治館、3号館、アグネスホール。当時の制服や学校生活のお話も。「英語を好きにしてくださったのが酒井先生（磯野先生のお父様）」「夢を見るのはいつも平安女学院での学校生活。」と語られ、熊本被災地応援のお手伝いを引き受けてくださいました。

私たちと共に被災地応援続けましょう！



あなたも、実行委員会に入って、「被災地の今」を学習しながら応援活動をしませんか。待っています。

薄れる記憶どう伝える

東北の地方紙「河北新報」の6月14日の特集では、「薄れる記憶どう伝える」という問題提起がありました。完全な復興には程遠いものの、被災地の景観はだんだんと変わっていきます。右の写真は8年前におきた岩手・宮城内陸地震（震度6強）で崩れた^{まつるべ}祭時大橋です。熊本地震と同じ内陸地震でしたが、広範囲の地盤の崩落、その後の二次災害が警戒されていました。さて、今はこの橋はどうなっていますか。それは「災害遺構」として残っています。



岩手県・一関市の周遊ガイドのメンバーは、地震と山の恐ろしさの両方を伝えるためにこの崩れた橋を見せているそうです。「災害遺構」はその恐ろしさを一目で伝える力を持っています。それゆえ難しさもあるのではないのでしょうか。被災者の中には、遺構を見ることで心に負担がかかる人もいます。しかし景色が変わり、時が経てば災害の恐ろしさを忘れるのではないか、そのような考えもあります。昨年の夏、実行委員の高校生たちは南三陸町の防災対策庁舎（右下の写真）をBRTから見ました。この建物はパブリックコメントを受け、宮城県が2031年まで管理する「震災遺構」となりました。阪神淡路大震災で傷ついた建物の一部も残されています。風化させない取り組みとして、轍の読者の皆さんにも憶えてほしいと思います。



核の平和利用について考える



「史上最大の原発事故を起こした日本が、再稼動にこだわるのはなぜか」。「核の平和利用」を問うドキュメンタリー映画「アトムとピース」を紹介します。東日本大震災は、置き去りにして議論してこなかった戦後の日本社会の問題を如実にあらわした事件でした。なぜ事件と呼ばなければいけないのか、それは安全と思われていた原子力発電所の事故によって単なる天災と呼べない事実が世の明るみに出たからです。監督の新田義貴さん（46歳）は、事故の後ずっと持っていた疑問をひとつの映画でカタチにしました。長崎の被爆3世の松永瑠衣子さん（24歳）が、青森の六ヶ所村、福島の浪江町、そして彼女のルーツである長崎を旅して「核」に対する考えを深めていく物語です。震災から5年が経った今も、解決できていない事件をこれからどのように考えていくべきか、皆さんも話し合ってみませんか。

↑これから各都市で上映予定↑